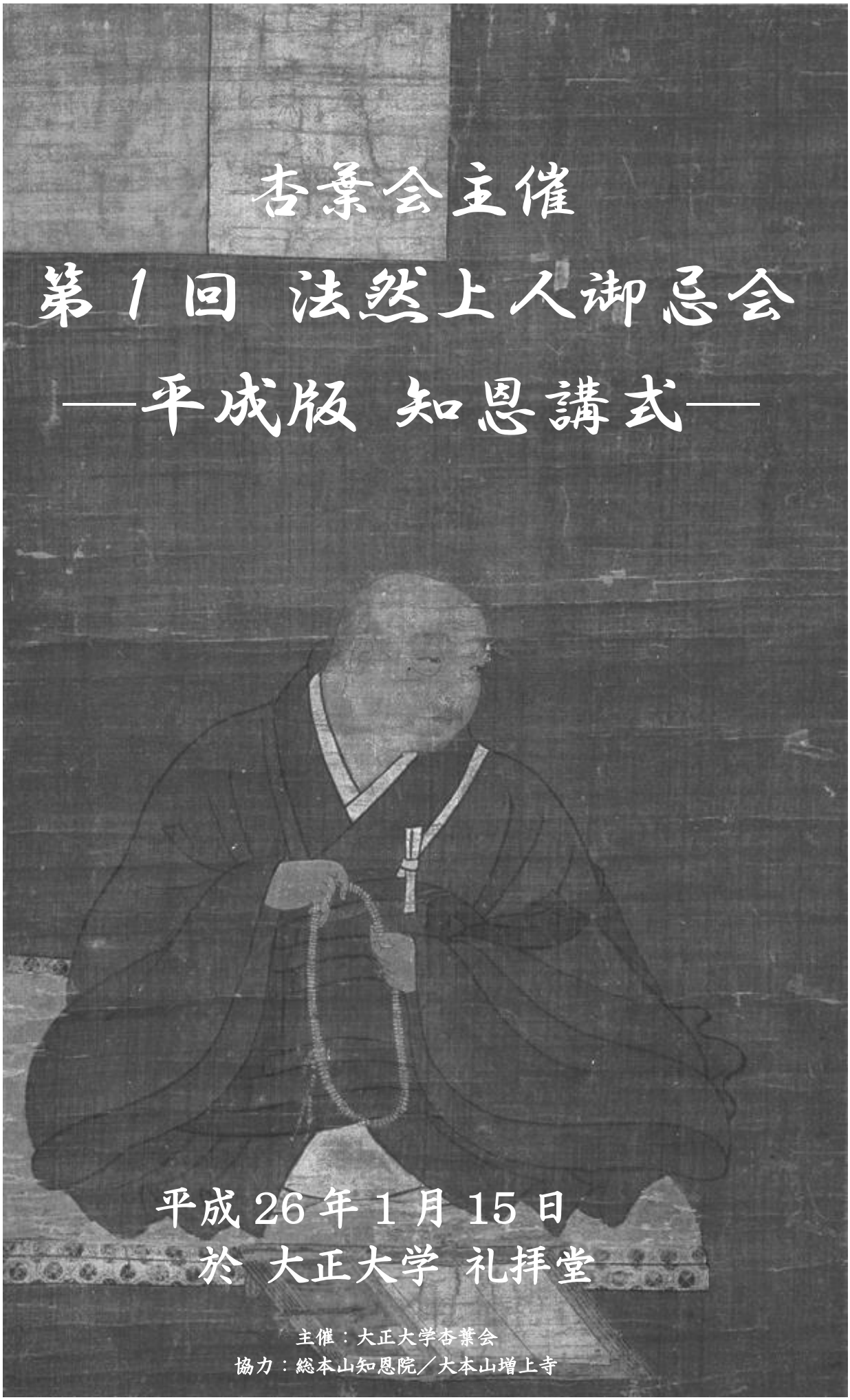
杏葉会主催

第１回 法然上人御忌会

―平成版 知恩講式―



平成 26 年 1 月 15 日

於 大正大学 礼拝堂

主催：大正大学杏葉会

協力：総本山知恩院／大本山増上寺

法然上人御忌会「平成版　知恩講式」について

「御忌会」とは法然上人がお亡くなりになられた日を期して、上人のご遺徳を偲び、ご遺訓である『一枚起請文』を声高らかに拝読し、一心にお念仏を称える忌日法要のことである。本御忌会では、平成23 年に浄土宗総合研究所の「伝承儀礼班」（当時）が作成した「平成版　知恩講式」を用いることとなった。これは隆寛作とされる『知恩講私記』を基にして、法然上人の行状を現代風に分かりやすくアレンジしたものである。知恩講式の目的は、法然上人の伝記と法語を捧読してその徳行を讃歎し、上人の行業を目の当たりに再現して追体験することであるから、御忌会に用いるのに適した内容である。

式文の作成にあたって、浄土宗総合研究所の西城宗隆研究員が第一・二・三段を、林田康順研究員が第四・五段を担当した。また、プロジェクター投影に使用した絵像については、総本山知恩院より『四十八巻伝』の各場面および什物の画像データ、東京教区・勝専寺様より芹沢銈介『新定法然上人絵伝』（理想社、1955 年）の資料をそれぞれご提供いただいた。

講式について

講式は仏・菩薩または祖師の恩徳をわかりやすく説き明かす法会をいう。「講」は念仏講の講ではなく、講説であって、講式を柱として構成された法会をいう。講式は、【式文・伽陀・礼文】という式次第を一段とし、これを数段に組み合わせた法会をいう。仏・菩薩・祖師の讃歎文を「式文」（書き下し文）として数段にわたって捧読し、この式文の要旨を「伽陀」（漢文体の偈文）として節を付けて数段を唱え、仏・菩薩・祖師の名を称えて礼拝する「礼文」を数唱する。一般的にはこれを一段として三段・五段等のようにして構成して行うが、これに宗派独自の儀礼を付加することもある。近年にいたるまで制作が続けられ、旋律・構成などの形式を脱却したさまざまな講式がみられた。

『知恩講私記』について

『知恩講私記』は、法然上人の恩徳を讃える儀礼の次第を記したもので、その構成は三礼・表白・【式文・伽陀・礼文】・六種回向からなる。中心となる式文は法然上人の五つの恩徳（①諸宗通達・②本願興行・③専修正行・④決定往生・⑤滅後利物の徳）を讃えたものである。本文献は講式の式次第としての性格を持つ一方、五段の式文は誕生から臨終来迎にいたるまでを綴った一種の法然上人伝となっており、『醍醐本』や『私日記』とならんで最古層の法然上人伝としても貴重な資料となっている。ちなみに、知恩講とは遺弟たちによって法然上人の御廟で月忌に勤められた追善法会とされるから、上人の入滅直後には本書を用いてその恩徳が讃えられていたことも考えられよう。

作者については、近年にいたるまで本願寺三世覚如の長男である存覚（1290―1373）と誤認されていたが、昭和 39 年に櫛田良洪師が京都・東寺宝菩提院を調査したところ、『秘抄口決』という文献の紙背から『知恩講私記』と『別時念仏講私記』が発見され、ともに長楽寺隆寛の著作であるとの推定がなされた。成立時期は、嘉禄の法難の影響がみられないことや式文に付される偈文に『般舟讃』が引用されていることを勘案すると、建保五年（1217）以後、10 年ほどの間とみられる。

初期の頃は法然門下や周辺の勧進聖たちに伝えられたと思われるが、その後、作者が誤認された経緯もあり、浄土宗の寺院に伝来した形跡はまったくみられない。一方、浄土真宗の本願寺系統の寺院では九世実如（1458―1525）の頃まで相伝されていたことが確認でき、数種の写本（東寺宝菩提院本、光徳寺本、本善寺本、善立寺本、大谷大学写本、魚山叢書本など）が残存している。

内容的な特徴としては、天台宗的な要素がみられる『私日記』よりも、浄土宗的性格が色濃い『醍醐本』との関係がより深いとされ、入滅に関する記事は『四巻伝』『琳阿本』『古徳伝』『四十八巻伝』など、その後に成立した諸伝記にも影響を与えている。また、諸伝記のなかで法然上人の『選択集』の文章をそのままの形で引用したのは『知恩講私記』が初である。いずれにせよ、浄土真宗系の伝記とは一線を画すものであり、『知恩講私記』は法然上人の恩徳を讃える御忌会にふさわしいものといえる。